←ハルマンが作ったと神話に伝わる済州島の象徴ハルラ山をクロンビから眺める（撮影：チョ・ソンボン監督）

因陀羅網 Indra's net ～今、ここでコミューンを生きる

ハルマン注1、この島をつくってくれて本当に有り難う!

田恩伊（チョン ウニ）

いよいよ、近づいて来ました。３月 11 日の焼津から「クロンビ、風が吹く」上映会がスタートします。今年は 1954 年３月にアメリカがマーシャル諸島のビキニ環礁で行った水爆実験から 61 周年になります。被爆された 日本のマグロ漁船の第五福竜丸が焼津の港についたのは３月 14 日。23 人の乗組員全員が被爆されて帰ってきました。その後、乗組員個々人の被爆だけではなく、水爆実験による海洋汚染や大気にまき散らされた放射性物質に対する不安などで大きな社会問題となりました。この時に使われた水爆は広島型原爆の 1000 発分の破壊力があったとも言われています。ビキニのことは核を持たない世界づくりや、平和、外交・政治関係における自主性などを象徴する大事件でしたが、今ではあまり知れ渡っていないようにも見えます。

しかし、福島原発事故は核に対する問題意識を新たに引き起こしており、平和憲法を変えようとする最近の動きや沖縄の基地問題とともに、人々に危機感に募らせる大きな要因になっているようです。こうした問題が一気に噴出している中、この頃は歴史を遡って過去から学ぼうとする動きも活発に出てきているという話しも耳にしています。焼津はまさにその学びの象徴的なところだと思います。歴史の教訓と象徴につつまれた 焼津から「クロンビ」がスタートする。意味深い何かを感じます。起こっている問題は違っていても、「クロンビ」の風が「より良い共同体」「より良い社会」「より良いクニ」「より良い世界」をつくっていこうとする人々に春の暖かいそよ風になってほしい、と願っています。

さてさて（｀いよいよ｀とリズムがあって^^)、今日は「クロンビ」上映日本ツアーの「実行委員会」の成り立ちについて話しをしたいと思います。この前に大阪吹田市にある「モモの家」に行って来ました。実行委員の一人松村さんがここのクリエーティブメンバーとして活動しており、韓国のコミュニティについて話してほしいと招いてくれたからです。参加者たちと挨拶を交わし、「名前のない新聞」にもコミュニティのことを連載していると話したら、ある方から「あ～、あのちょっとわからない、難しいことを書いている方ですね、、、、」と言われました。そうだったですね。難しかったですね！ そう言う経緯もあって、語彙に限りがあってあまり自信はありませんが、今日はできるだけ砕けた文章で頑張ってみます。

私のような外国人の「アウトサイダー」（決してネガティブな意味ではありません）は、いくら日本の世界に溶け込んで生きていても、電車の中でよく耳にするような「親密」な関係の中で交わされる日常の言葉には触れにくいことがあります。学校や家ばかりを行き来する生活が続く人にはなおさらです。 日本に長くいればいるほど「言葉」の問題から自由になれない、しかしながら言葉を通じて疎通し合う世界に拘るようになってきました。

またまた、（｀さてさて｀に続く）前置きが長くなりました。

「クロンビ」のポスターやチラシなどの配布も終わり、上映会が近づいてきたので、先週の月曜日に幕上げを準備する実行委員会の会議を行いました。会議と言っても、この上映会を進めている実際のメンバーはたったの３人です。一人は皆さんもよくご存じの『名前のない新聞』のあぱっちさん、そしてもう一人は「モモの家」の松村さん、そして私です。私たち３人が実行委員となって、「クロンビ」の上映会にかかわるようになったのは、３人とも全く予想もしなかったことでした。 前回の連載にも少しは触れましたが、私たち３人は済州で行われた「済州平和祭 2014」でたまたま一緒でした。と言っても、前からお互いについて少しは知っていましたが、まさか「クロンビ」の上映にかかわることになるとは思いませんでした。

平和祭の参加目的や思いも皆それぞれ違っていたと思います。私は日本と韓国の若者たちが環境、エコロジー、コミュニティ、平和、文化などを盛り込んだイベントを「済州」で開催するという話しに大きく惹かれました。また 私の研究の一部でもある 1970 年代の 日本の「カウンターカルチャー」世代を代表する何人かがそのイベントに参加するという話しを聞いていたので、歴史の中の人たちに会えるという高ぶった気持ちにもなっていました。私が連載を通して一貫して書いてきたことは、なぜか日本の運動や活動には世代の継承性が見えにくく、唯一それらしい継承性が見えていた

↑「クロンビ、風が吹く」上映会の共通チラシ　☆各地の上映会情報は p11 の下の表またはサイトをご覧下さい。

のは、コミュニティやエコロジー、そしてどこかにスピリチュアルな要素を帯びている世界にその継承性や痕跡があるということです。「済州平和祭」にはそうした私の考えを確認出来る何らかの動きがあるだろうと期待と可能性を感じて参加した訳です。

あぱっちさんは、過去ご自身で1970年代のカウンターカルチャー世代を記録してきたこともあり、当時はじめた『名前のない新聞』を今でも出し続けていることから、新聞の取材も兼ねて昔の思いを寄せて参加していたようです。松村さんは韓国で行われたUNの国際会議「生物多様性条約COP12」に参加し、韓国のコミュニティも見て回って済州平和祭に参加すると言う日程でした。私たちはこうしたそれぞれの思いをもって済州平和祭の開幕日の夜に一緒になったわけです。開幕日の夜に時間もかなり遅れて上映したのが「クロンビ、風が吹く」という映画でした。済州のカンジョン村の事や映画、チョ監督については、前回の連載に書きましたので、改めて言及しません。チョ監督が済州の4.3事件を取り上げてつくった「レッドハント１」「レッドハント２：国家犯罪」は、日本にも一部の人たちには知られているので、この監督は日本と全く縁のない人ではありません。

ところで、急な展開はこの映画の上映が終わってからでした。上映の後監督も話しましたが、すでに北海道で行われた映画祭や沖縄の桜坂劇場で特別上映会を行ったそうです。しかし本格的な封切りはしていないということで、これから編集のやり直しや字幕の修正を行う予定だということでした。しかし、ハルラ山の中腹で夜の冷え込みが激しい野外で上映されたにもかかわらず、映画を見ていた人々は深い感動を受けたようでした。美しい島の小さく平和な村にある日突然訪れた「海軍基地建設」指定の便り。その日から村人たちの生活と共同体は、まるで根そこから引き抜かれた木のようにひっくり返されてしまいます。南北が対峙する分断状況が続いている中で、中国と日本、そして遠くはアメリカまで関わって小さな半島の人たちに「防衛」という名のもとで行われる「国家」の決定は、その力の大きさに代わってくれるものも中々ありません。しかし、小さなカンジョン村の人たちは「武力」や「軍事的なもの」が決して平和をもたらすものではないことを信じて、2006年から今日まで９年間 闘い続けています。そしてこの映画には、命がけのような壮烈さもありますが、小さな人々のユーモアと笑い、涙と喜び、分裂と許し、助け合いと連帯、唐突と大胆さ‥‥などなど、人間くさい様々な物語が綴られていました。カンジョンの人たちの９年間の時間を「戦い」という言葉を使って表現するには、物足りないような気もします。映画はこうしたカンジョンの人たちを美しい音楽と自然、そして厳しい公権力との対立の中で追い続けていました。

映画が終わった後、何人かの人が監督のところに来て、日本でも「クロンビ」を上映したいという話しを持ちかけました。私は久しぶりに会った監督に挨拶をしてから会場を去るつもりでしたが、日本語が全くわからない監督から私に上映の話の対応を頼まれ、私がその場で何件かの上映の意思を受け取ったわけです。 こうした「風」にのって「ことの流れは」急に自分が流れて行きたい方向へ一人歩きを始めました。私たちは時々ある超越的な力によって自分が使われているような経験をすることがあります。かの有名な聖フランシスコの平和の祈りは次のような言葉で始まります。「主よ、わたしをあなたの平和の道具としてください」と。また、別のいい方で日本語には「生かされて生きる」という表現があります。後者は日本人の世界観を深く反映した、韓国ではなかなか翻訳しにくい表現ですが、こうして、「クロンビ」は私たちを道具として使い、生かされる立場となりました。

☆1月31日、カンジョン村では軍官舎建設反対の住民のテントに対し代執行が行われ多数の負傷者や逮捕者が出た。→写真はその直前のもの。村会長や副会長らが櫓にのぼっている。（撮影：監督）

平和祭から日本に戻って来て、同じく関西に住んでいるという利点もあったため、お二人と「クロンビ」の日本上映について相談しました。その間に、また別のところからも上映会の話しが持ち込まれました。そして、話しは自然と上映会のツアー形式に向かうようになりました。何気なく流れは松村さんが事務局を引き受け、広報やウェブ制作・管理などをあぱっちさん、そして韓国と監督とのやりとりは私が担当することになったわけです。

現在、全国各地で様々な活動をしているグループ約１５カ所の上映が決まっています。上映ツアーのために制作したポスターやチラシ、ウェブ、上映規約などのすべてが自分たちの手作りです。大きな枠組みや後の細かい内容は３人で相談しながら決めて行きましたが、健康問題を抱えていた私は中々反応が遅い監督を相手にして韓国側の準備状況などをチェックしたり、ちょっとした食べ物を用意したりしただけです。上映会がはじまったら関西一帯の通訳を担当することになっていて、監督が来日している間の彼の動線をチェックする役割を担当することになっているので、ツアーが始まったら役割が本格化します。もちろん、こうして不慣れな私たちの対応に何の不満も言わずに、それぞれの開催地で自主的に動いてくれた上映グループの協力が無かったなら、ここまで来れませんでした。私はこうした理解や連帯こそが、未来の関係性を回復し、社会の地べたから変えていく何かを持っているものではなかろうかと思います。

今回の映画上映を通して、誰のためになるとか、何かが得られるということはほとんど考えられません。逆説的に言い換えれば、きっと誰かのためになり、何かが得られるはずです。唯一具体的に望むことがあるならば、それは「平和」を生きたいと願う人々の輪がもう少し広がり、その輪が国境や文化の違いを越え、再び自分が生きる小さな居場所に戻ってくること。そして、それが日常になっていくこと。

私はこの「日常」が大切だと思います。ある日の突然の出来事や感動的な映画、講演、作品などで私たちの生き方や考え方が変わり、世の中が変わって行くものだとは思いません。「クロンビ」は私たちの胸の中に深い感動を投げかけるかもしれません。しかし、感動は日常として生きているものにするには、 常に次の出会いの準備をしていかなければならないと思います。 「平和」を生きることが常になった時点で、そうした生活そのものが次の世代に自然と受け継がれて行くはずです。そして、次の世代はまた自分たちに合った方法や形を見つけ出しながら「常」をつくって行きます。今回の上映会を契機に巡り会えたすべてのグループと皆に、こうした優しい日差しの春風が吹いていくことを願います。

注1 ハルマン：お婆さん、という意味の済州方言。済州をつくったと言われている女神ソルムンデハルマンを言う。